

どう防ぐ?



ネット・トラブル

「しよどい」「とりま」「あーね」「り」…。これは暗号でも、外国語でもない。青少年がネット上で普通に使う日本語会話だ。極端に省略してあるが、それぞれ「正直しんどい」「とりあえずまあ」「ああ、そつだよね」「了解」という意味になる。

今回はネット上での「文字」と「意思疎通の関係」について述べたい。SNSにしてもメールにしても、ネット上での会話は文字が基本だ。特に子どもたちのネット会話は極端に短い言葉が、連続的に交わされている。推敲(すいこう)している。推敲(すいこう)している。

「しよどい」「とりま」「あーね」「り」…。これを全くせず、会話をすることなく、ポンポンと思いついたままに送り合う。そして省略しすぎるゆえ、加えて短時間に多頻度過ぎるゆえ、相手を傷つける言葉を発してしまつて危険性をもつ。

一例を挙げよう。子どもたちにとって「ヤバイ」という言葉は両極端の2つの意味を持つ。何かを褒め称(たた)える場合も、非難や危機的状況も「マジ、ヤバイ」になる。面と向かつて話している誤解はないが、文字だけでは読み違つて危険性も持つ。

もともと日本語には省略の文化がある。例えば

『万葉集』には死者を悼(いた)む「挽歌(ばんか)」があるが、「死」という言葉はストレートに出るこない。相手をいたわるからこそ直接的表現を避けている。しかし、万葉集の時代には「多頻度かつ即時の返信」は要求されていない。ネットでの会話ではじっくり考える時間的余裕がないから

文字と意思疎通の関係

両極端の意味にとれる誤解

読み違う危険性



S. TSUDA

からこそ、誤解を生みやすい表現も出てしまつ。米心理学者アルバート・メラビアンは、発せられたメッセージと人の行動について研究をまとめた「Silent messages. 1971」。詳細は略すが、感情や態度について矛盾したメッセージが発せられたとき、行動に影響がある刺激は、内容などの言語情報が7%、口調や話の速さなどの聴覚情報が38%、見た目などの視覚情報が55%。つまり文

字の情報、はコミュニケーション手段として、想像以上に非力と言えそう。加えて別の観点だが、トラブルとなる書き込みをする時間帯は午後9時以降が多い。医学的根拠は不明だが、夜間の子どもの文字での発言は、生理的な興奮もあるのか、過激な表現が多いことは確かだ。

大人であってもメールや書き込みでトラブルになることもある。当然子どもたちにとっても文字だけのやり取りは非常に難易度が高い。こうした観点からも、子どもたちのLINEやメールのやりとりが、とても心配になつてしまつのは私だけだろうか…。